

1991年にソビエト連邦が崩壊した時、共産主義は敗北し、資本主義が勝利したと評価され、以後、米国を中心にした資本主義が世界を席卷したかのようになった。しかし、資本主義にも矛盾が噴出した。日本でも、内橋克人氏は、目指すべき経済は連帯、協同による「共生経済」であると主張した。水野和夫氏は「資本主義の終焉」を説き、経済成長の追求は企業が損失を被り、国家が秩序を失う時代になると分析した。斎藤幸平氏は、マルクスの思想から、気候変動、コロナ禍などの文明崩壊の危機に、解決策は潤沢な脱成長経済だと言う。これらの資本主義の弊害と行き詰まりを見抜いていたのは、世界的な経済学者・宇沢弘文氏ではないか。書棚から、宇沢氏が亡くなられた後、出版された『人間の経済』を取り出し、読み返してみたが、深い感動を覚えた。「序」の「社会的共通資本と人間の心」で、下記のように書き始めている。「人間は心があってはじめて存在するし、心があるからこそ社会は動いていきます。ところが経済学においては、人間の心というものは考えてはいけな、とされてきました。マルクス経済学にしても人間は労働者と資本家という具合に階級的にとらえるだけで、一人ひとりに心がある、とは考えません。また新古典派経済学においても、人間は計算だけをする存在であって、同じように心を持たないものとしてとらえている。」宇沢氏は「社会主義の弊害と資本主義の幻想」を指摘する。「社会主義の弊害」は、ソ連全体を収容所列島のようにしながら、東欧の国々を過酷に支配することで、この弊害は消滅したが、後遺症は残っている。「資本主義の幻想」は、西側諸国で増している市場原理主義の運動が人々に大きなダメージを与えていることである。狂信的と言えるほどの市場原理主義者のミルトン・フリードマンを激しく否定する。経済は人のためにあるもので、それは、人間の尊厳と市民的自由を守ることである。そのためには、医療、教育、農業、自然環境、平和などの「社会的共通資本」をきっちり守り、育てることである。これらの論旨は、世界で起こっている様々な事象を冷徹に見据え、足を運び見聞きしたところから生まれている。知性の高さエネルギーな活動に圧倒された。宇沢氏は、20世紀最高の経済学者と言われたケインズより、石橋湛山の方が優れた経済学者であると言う。ケインズにはノーブルな心があまり感じられないが、湛山は、経済は人間が人間らしく生きるためのものという人間存在に重きを置いていると評価している。

そこで、本棚から『石橋湛山評論集』を取り出し、読み返してみた。大正10年、富国強兵、植民地獲得に邁進している時、「大日本主義の幻想」で下記のように書いている。

「朝鮮・台湾・樺太も棄てる覚悟をしる、支那やシベリアに対する干渉は、勿論やめろ。…賢明なる策はただ、何らかの形で速やかに朝鮮・台湾を解放し、支那・露国に対して平和主義を取るにある。而して彼らの道徳的後援を得るにある。」湛山は、武力による支配ではなく、平和に共存することによって、道徳的に後援されると言っている。

私は、経済や政治について論じるような知恵はないが、上記のことから、世の支配者、権力者が軍事力、経済力をもって、他を押し、支配しようと懸命に突っ走っているところには、分裂と争いしかないのではないかと思う。力を振り回すのではなく、生身の人間が生きていること、その人間の命と尊厳を守ることが経済や政治の役目であると思う。

ロシアのウクライナ侵略戦争は先が見えない。パレスチナとイスラエルの戦争は何人の死者を出すのであろうか。カトリックのヨハネ・パウロ二世の「平和は人類にとって、いちばん大事な共通の財産である。特に日本の平和憲法は、平和を守る非常に重要な役割を果たす社会的な資産である」という言葉をかみしめたい。